

第2章 史跡高遠城跡をとりまく環境

第1節 位置

伊那市は長野県の南部に位置し、南東側は南アルプス(赤石山脈)を境に山梨県と静岡県に、西側は中央アルプス(木曾山脈)を境に木曾地域に接しています。東西の長さは37.2 km、南北の長さは44.7 kmに及び、市域の面積は667.93 km²で、松本市、長野市に次いで県下3番目に広く、長野県の総面積の5%を占めます。2つのアルプスに挟まれた中央部には、標高約600mの伊那盆地が開けており、市内の標高の最高地点は南アルプス塩見岳東方山頂の標高3,052mで、最低地点である東春近田原天竜川河畔の標高590mと比較すると、2,500m近い標高差があります。伊那盆地の中央を流れる天竜川は、三峰川等の支流を合わせて南下し、天竜川に向かう形で山麓には扇状地、河川沿いには河岸段丘が形成されています。また、伊那市内北端の杖突峠から分杭峠には、日本最大級の断層である中央構造線が走っています。

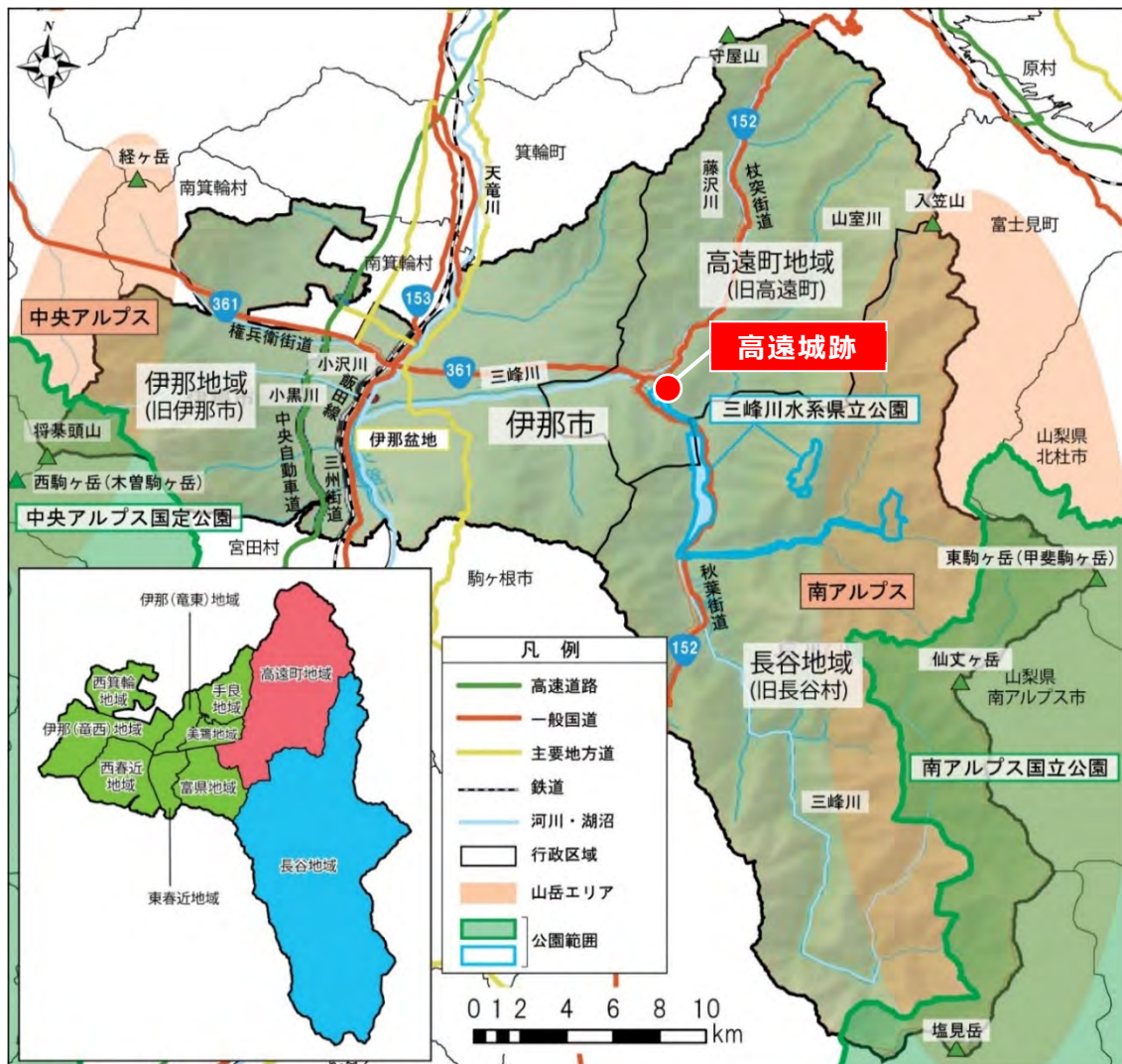


図. 伊那市の概況と高遠城跡の位置

(資料：国土交通省 国土数値情報)

高遠城跡が所在するのは伊那市^{たかとおまちひがしたかとお}高遠町東高遠で、中央構造線に沿って南に向かって流れる藤沢川と、北に向かって流れる三峰川がともに流路を西に向けて合流する地点の東側台地上に位置します。中世以前から重要な街道であった杖突街道^{つえつきかいどう}を眼下に見下ろし、北、西、南の三方は急崖になっています。標高は二ノ丸北口付近で803.9mですが、崖下を流れる三峰川の河床^{かしょう}の標高は730mであり、その比高差は約70mとなっており、まさに天然の要害です。

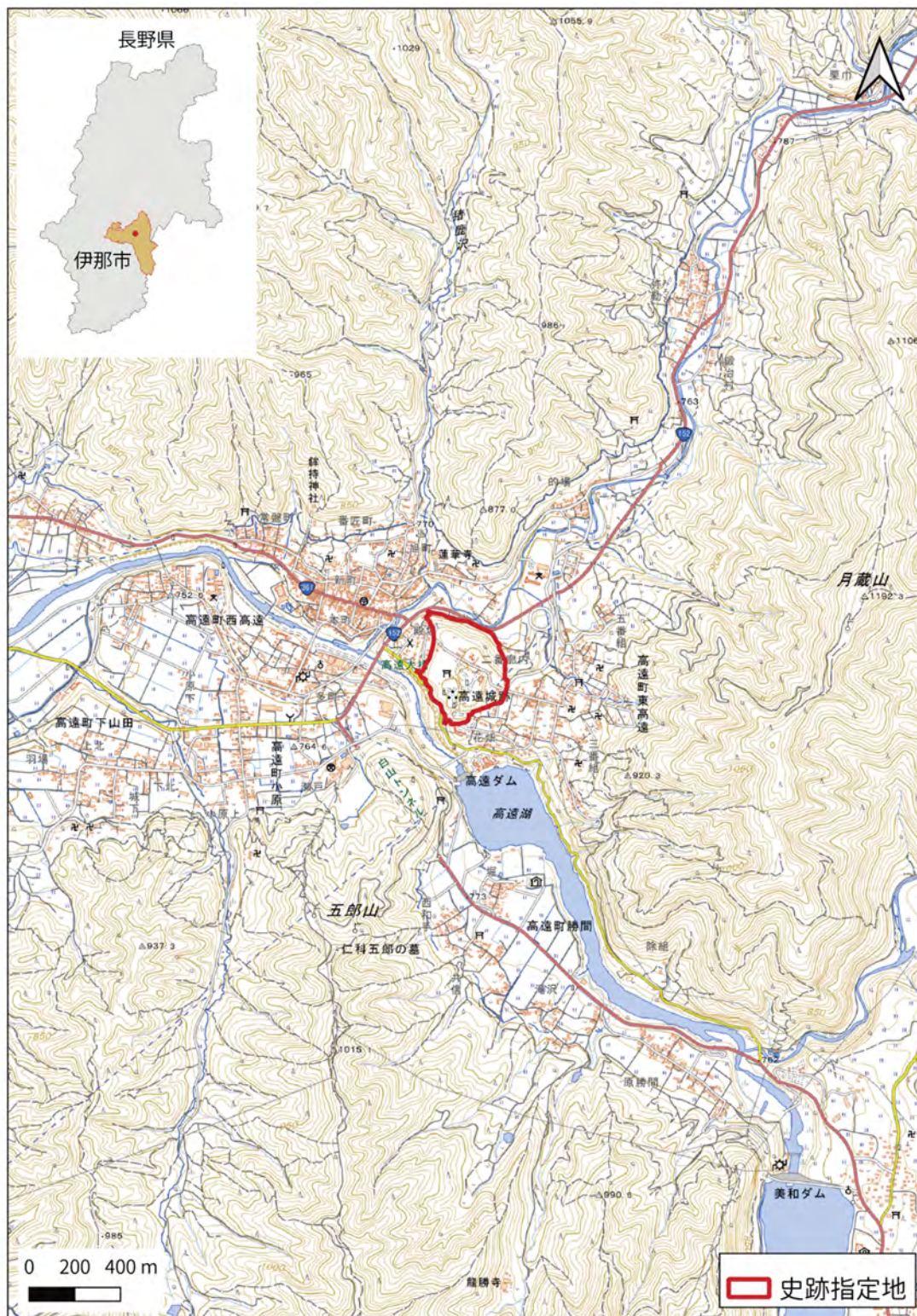


図. 史跡高遠城跡の位置と指定地

第2節 自然的環境

1 気候

高遠城跡が所在する伊那市は内陸特有の気候で、気象観測所伊那地点(伊那市下新^{しもしん}田)の過去10年間の気象データを見ると、最高気温は34～37度台、最低気温は-14～-8度台で推移しており、年較差が大きい特徴があります。年度別の降水量は1,140～2,010mmの間で推移しており、年間降水量の平均値は1,573mmとなっています。平成27年(2015年)から令和6年(2024年)の平均年間日照時間は2,126時間であり、伊那市は長野県内でも日照時間の多い地域といえます。

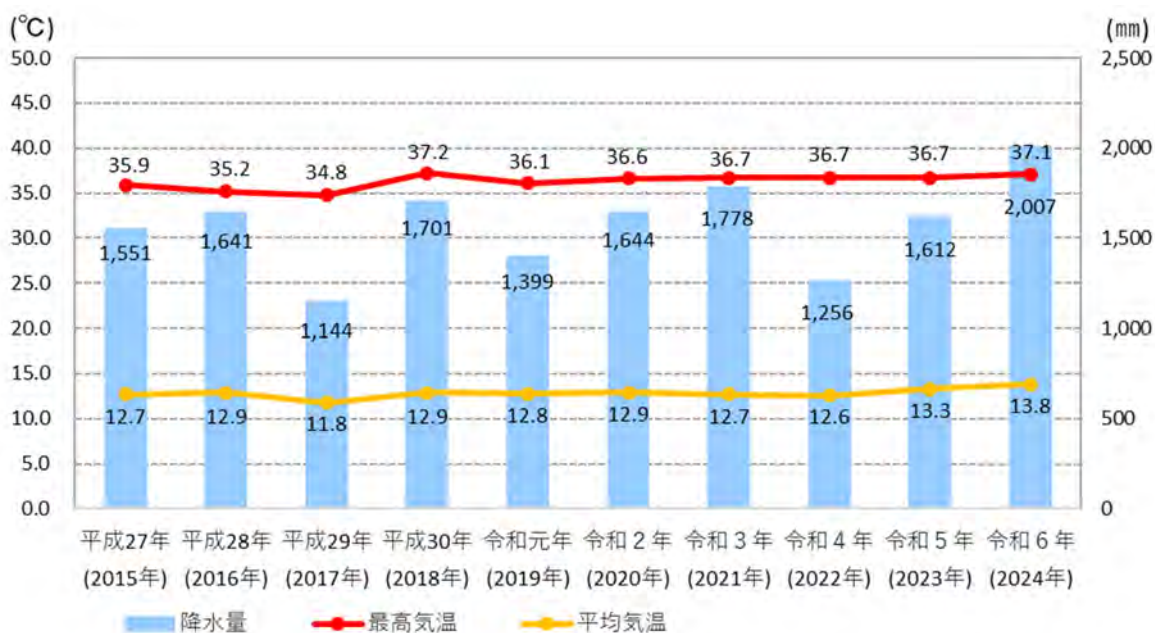


図. 伊那地点の過去10年間(平成27年～令和6年(2015～2024年))の気象データ

表. 伊那地点の過去10年間(平成27年～令和6年(2015～2024年))の気象データ

年	気温			降水量 (mm)	日照時間 (h)
	最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	平均気温 (°C)		
平成27年(2015年)	35.9	-11.0	12.7	1550.5	2106.7
平成28年(2016年)	35.2	-14.5	12.9	1641.0	2119.1
平成29年(2017年)	34.8	-10.9	11.8	1143.5	2134.3
平成30年(2018年)	37.2	-10.7	12.9	1701.0	2302.6
令和元年(2019年)	36.1	-9.6	12.8	1398.5	2098.5
令和2年(2020年)	36.6	-9.0	12.9	1644.0	2127.3
令和3年(2021年)	36.7	-9.2	12.7	1777.5	1816.9
令和4年(2022年)	36.7	-10.9	12.6	1255.5	2145.2
令和5年(2023年)	36.7	-12.0	13.3	1611.5	2351.7
令和6年(2024年)	37.1	-8.9	13.8	2007.0	2060.2

(参考：気象庁公開過去の気象データ)

2 地形・地質

伊那市高遠町北端の杖突峠から長谷南端の分杭峠まで中央構造線が貫いています。中央構造線とは、関東地方から九州地方まで1,000km以上に渡り延びる我が国最大級の断層です。中央構造線を境として、東側は主に変成岩で形成されており、南アルプス周辺部は固結堆積物が広がっています。西側は主に深成岩で形成されており、三峰川や天竜川といった河川の周辺では未固結堆積物が広がっています。

高遠城跡がある台地は三峰川が形成した扇状地で、扇状地が造られた後に、三峰川と藤沢川の浸食を受けて半島状に突き出した形となりました。城跡が乗っている地層は、下位より基盤岩・扇状地礫層・テフラ層となっており、基盤岩は領家変成岩類に属する黒雲母片麻岩で、この硬い変成岩が土台となり、その上を厚さ10mほどの礫層が覆っています。これらの礫は、三峰川や藤沢川が運搬したものです。城跡の北側は藤沢川に浸食された急な斜面で、表面は土壌に覆われていますが、南側は三峰川によって浸食され、基盤岩が露出した急崖となっています。

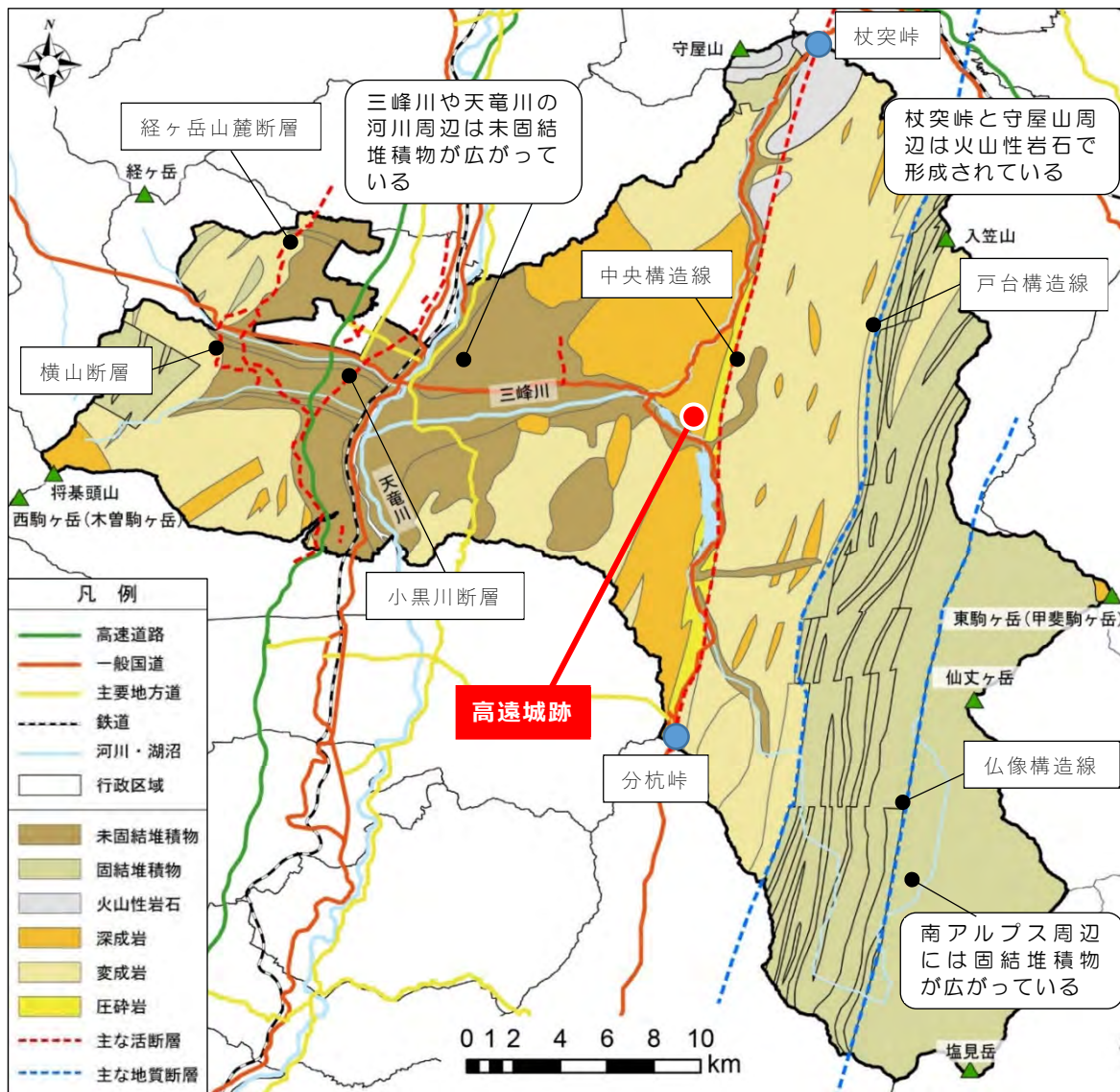


図. 伊那市の地質 (資料：国土交通省「20万分の1土地分類基本調査」、「伊那市防災マップ」)

3 植生

植生については、市内で最も広範囲に広がるのは、人が暮らす平野部や人里近い山に見られる「植林地・耕作地植生」で、農耕地やカラマツ・ヒノキ等の植林が多く見られます。市街地や里山に近い高遠城跡においても同様に、城跡内には戦後に植林されたカラマツやヒノキ等の山林や耕作地が存在し、様々な野生動物が生息しています。

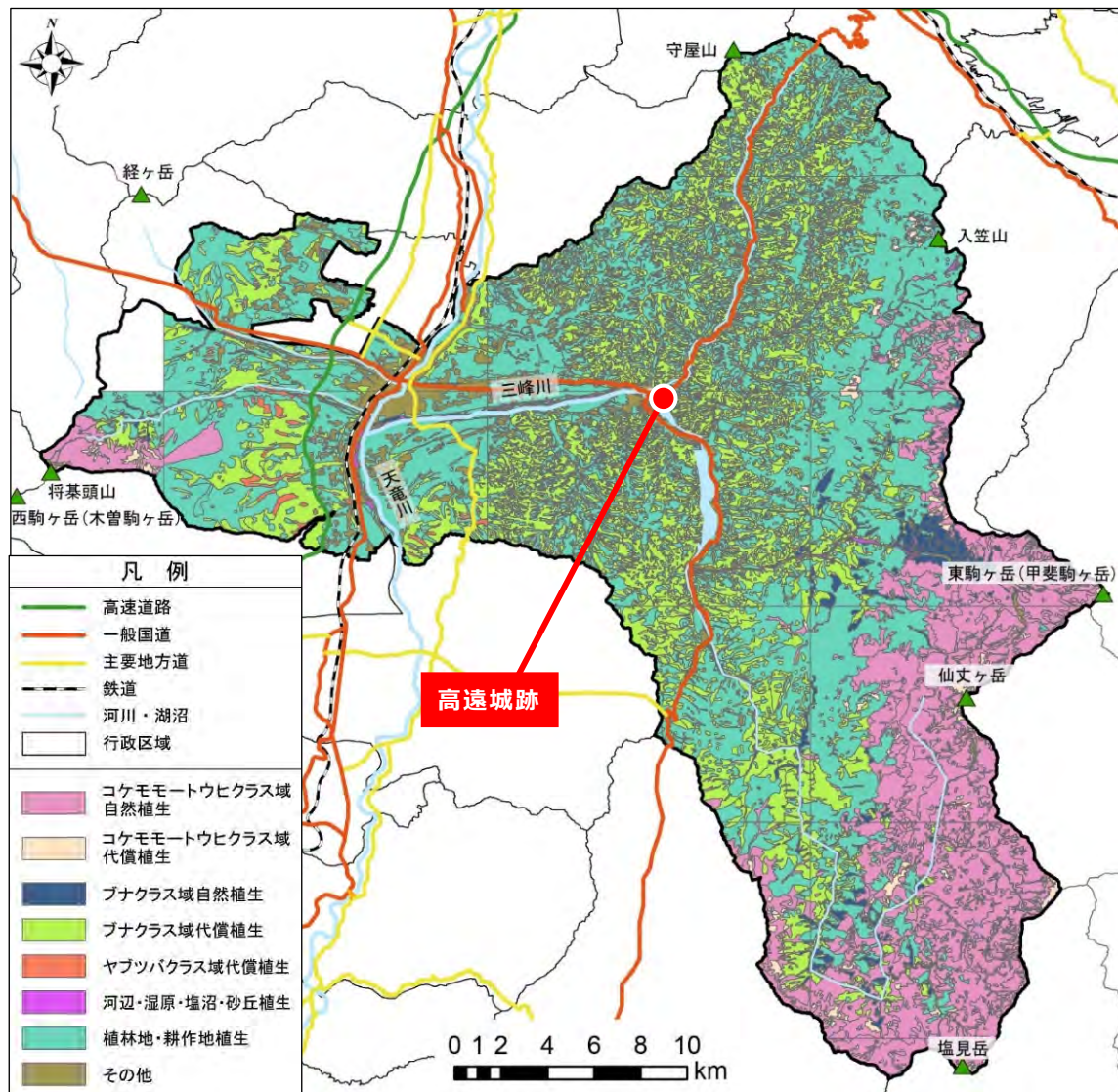


図. 伊那市の植生

(資料:「第7-8回自然環境保全基礎調査植生調査報告書」(環境省生物多様性センター))
<http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-006.html>

※1/25,000 植生図「木曾駒ヶ岳」、「伊那宮田」、「伊那」、「鹿塩」、「間ノ岳」、「市野瀬」、「仙丈ヶ岳」、「信濃溝口」、「甲斐駒ヶ岳」、「高遠」、「信濃富士見」、「辰野」、「茅野」GISデータ(環境省生物多様性センター)を使用し、作成・加工したものである。
<http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-006.html>

第3節 歴史的環境

伊那市内の周知の埋蔵文化財包蔵地は、令和7年(2025年)5月時点で421か所あり、水を得やすい山際や、天竜川・三峰川とその支流が形成した段丘端部に特に多くの遺跡が見られます。高遠城跡内からも縄文土器が出土しており、周辺には複数の縄文時代の遺跡があることから、高遠城跡が位置する高遠町東高遠の段丘上でも古くから人々が生活を営んでいたことが分かります。

高遠は地理的に諏訪に近く、古くから諏訪の影響を大きく受けてきた地域です。鎌倉時代、源頼朝は高遠やその周辺にあった2つの荘園「黒河内庄」と「藤沢庄」を社領として諏訪社上社(現在の諏訪大社上社)に寄進しており、高遠周辺の領主を務めた藤沢氏や高遠氏は、諏訪社上社の大祝を世襲した諏訪氏の一族でした。黒河内庄や藤沢庄、周辺の村々には、諏訪社の造営や神事の度に人足の負担が求められるなど、諏訪社とは深いつながりがありました。

諏訪地域と伊那地域を結ぶ「杖突街道」は古くから重要な街道で、戦国時代に杖突街道を通して高遠へ攻め入ってきたのが、甲斐(現在の山梨県)の戦国大名武田信玄です。甲斐から信濃へ侵攻した信玄は、諏訪を手に入れ、その後高遠に攻め入りました。高遠一帯を治めていた高遠頼継は信玄に敗れ、高遠は武田氏の領国の一部になりました。高遠は諏訪と伊那谷を結ぶ交通の要衝にあり、駿河(現在の静岡県東部)や遠江(現在の静岡県西部)に進出するための重要な地点であったことから、信玄は高遠城主に四男の諏訪(武田)勝頼や弟の武田信廉等、自分に近い人物を置いて伊那一帯を治めさせました。

当時、高遠や長谷には、日蓮宗と深いつながりがあり、優れた技術を持った大工集団である池上一門の職人がいましたが、彼らも武田氏に抱えられ、技術面から戦国大名をサポートしていました。戦国時代の高遠は、武田氏とのつながりで語られることが多く、武田氏ゆかりの文化財が多く遺されています。

天正10年(1582年)、尾張(現在の愛知県西部)の織田信長が武田の領国に侵攻すると武田軍は各地で敗走し、一気に滅亡に向かいます。南信州の拠点であった高遠城は、城主の仁科盛信(信盛)と織田信忠による壮絶な戦いが行われた末に落城しました。

戦乱の世が終わり江戸時代になると、伊那周辺は高遠領(高遠藩)と幕府領(天領)に分けられました。高遠領を治めた大名は、年代順に保科氏、鳥居氏、内藤氏の3家で、居城となった高遠城を中心に藩政を司りました。当初の領地は2万5千石でしたが、度々加増され、内藤氏が入封した元禄4年(1691年)には、3万3千石となりました。その頃の高遠藩の領域を現在の市町村に置き換えると、前述の幕府領を除く伊那市域、宮田村、駒ヶ根市の一部(東伊那、中沢)、辰野町の一部、塩尻市洗馬、東筑摩郡朝日村の一部です。この広い領内の景勝地を題材として、寛保3年(1743年)に藩士らが作成した絵巻物『高藩探勝』が伝わっていますが、これは藩主に献上されたもので、民衆の生活場面に和歌を添えた構成は八景趣味に通じ、文化度の高さを窺わせます。

元々錫持神社や建福寺の門前町であった現在の高遠町西高遠は、江戸時代になると城下町として発展し、三峰川右岸の狭い範囲に10の町が区分けされ、様々な商家や職

人が軒を連ねました。弘化^{こうか}2年(1845年)の10町の人口は3,003人で、幕末の文久^{ぶんきゅう}3年(1863年)に三峰川左岸に2つの新町が建設された後は、更に人口が増えました。高遠城下には多くの人や物が集まり、伊那谷北部(上伊那地域)の経済、文化の中心地として非常に賑わいました。

城下に暮らす人々の生活を支えたものの一つに、「高遠焼」があります。高遠焼とは、江戸時代後期に生産が始まった高遠産の陶器類のことで、高遠城内南曲輪^{みなみまぐるわ}の庭園へ引水するために、美濃^{みの}の陶工の協力を得て製作された土管がきっかけとなり、生産が始まりました。当初は藩営で、日用品に加え藩主同士の贈答品が制作されたと言われますが、後に民営に移されました。水甕^{みずかめ}や徳利^{とっくり}、鉢^ど、皿^{びん}、土瓶^{きゅうす}、急須^{わん}、碗^{つぼ}、花器^{つぼ}、壺^{つぼ}、手あぶり等の日用雑器は、城内や城下町のみならず領内一円の需要を満たし、さらには多領へも移出されました。近代になると、高遠焼は地場産業として一層発展を遂げています。

江戸時代、地方の教育を担ったのは、武士が通った藩校と、武士に限らず地域の人々が通った寺子屋や私塾でしたが、高遠藩が開いた藩校は「進徳館^{しんとくかん}」で、漢学(儒学)と筆道^{ひつどう}、武術を中心に教えられました。万延元年(1860年)の開校から明治5年(1872年)の廃城まで、わずか10年余りの期間に、通算500人ほどの生徒が通ったといわれています。伊澤修二^{いざわしゅうじ}や中村弥六^{なかむらやろく}等、日本の近代化を支えた人材を世に送り出したほか、教師になり長野県内各地で教壇に立った者も多く、高遠城で行われた教育が近代の人づくりに繋がっていったのでした。

明治時代になると、府県統合や町村合併の影響を受けて、地域の状況は大きく様変わりします。鉄道の開通や新道の整備等、交通事情の変化により、上伊那の政治経済の中心地は、高遠から伊那町へと徐々に移っていきました。現在は、高遠城を中心とした古くからの城下町という特性を生かした町づくりが進められています。

指定等文化財の状況を通して、伊那市内や高遠城跡周辺の歴史的環境を見ると、現在、伊那市の指定等文化財は146件あり、地域別では伊那地域が58件、高遠町地域が54件、長谷地域が32件、広域にわたるものが2件となっています。指定等文化財以外の歴史文化資源と併せて分布状況を見ると、伊那市街地付近や高遠町地域の西高遠、東高遠に特に集中していることが分かります。

西高遠、東高遠の両地区は、高遠町地域の中心地で、杖突街道^{あきはかいどう}と秋葉街道^{あきはかいどう}が交わる場所に近く、東高遠には高遠城と武家屋敷、西高遠には町人町^{ちやうにんまち}があり、古くから物流経済、文化、情報の集積地として、多くの人々が往来し、栄えた地域です。こうした地域特性から歴史文化資源が集中しています。

また、高遠町地域においては杖突街道沿いに多く歴史文化資源が分布していますが、前述のとおり、杖突街道は歴史的に重要な街道であったため、人や物の往来も多く、街道の繁栄を物語る多くの歴史文化資源が遺されているといえます。高遠町地域には、街道や城下町をはじめ、高遠城の存在があったからこそ花開いた文化が多く、高遠城を中心として、過去から現在まで様々な歴史が紡がれてきた地域です。

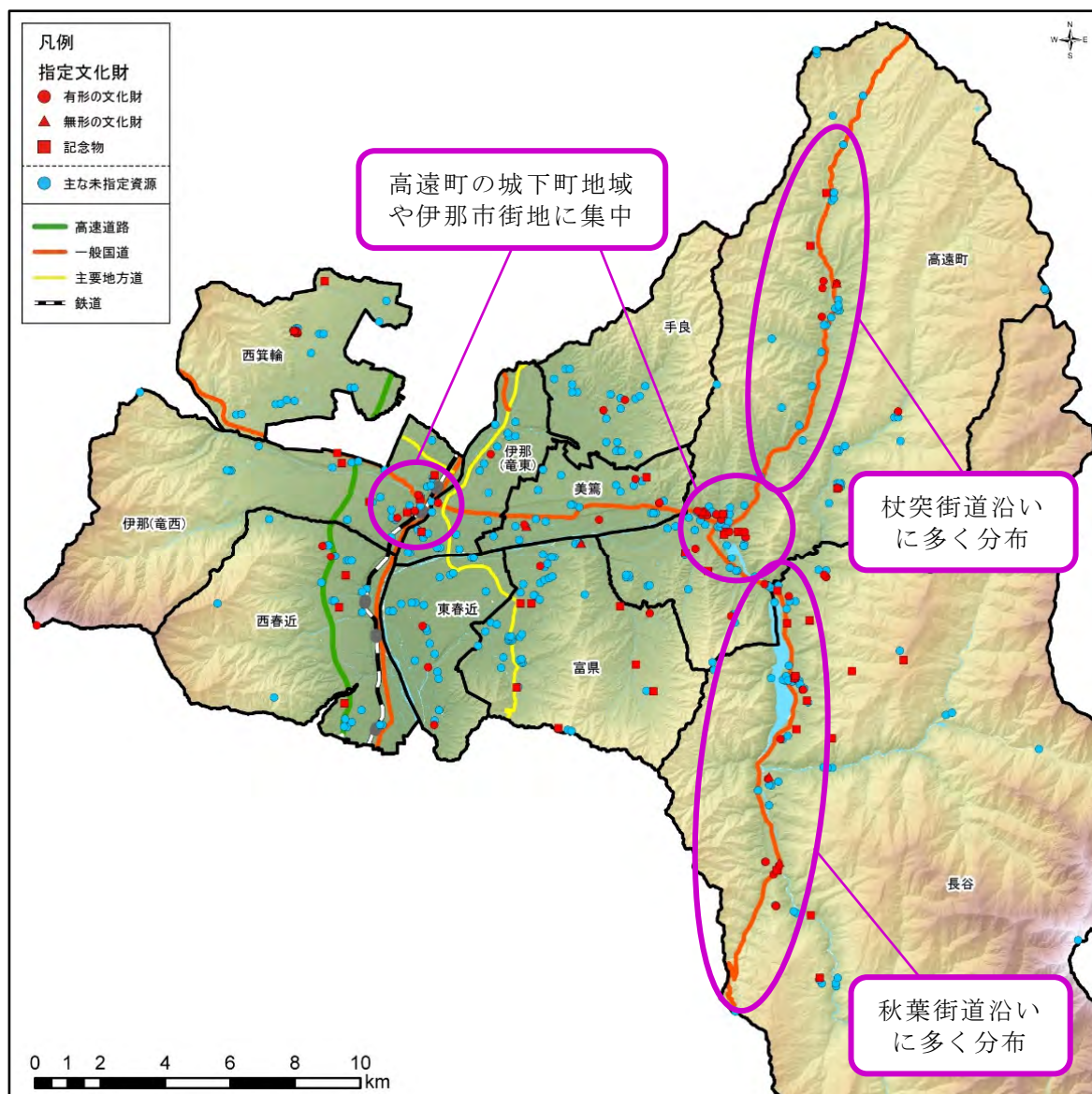


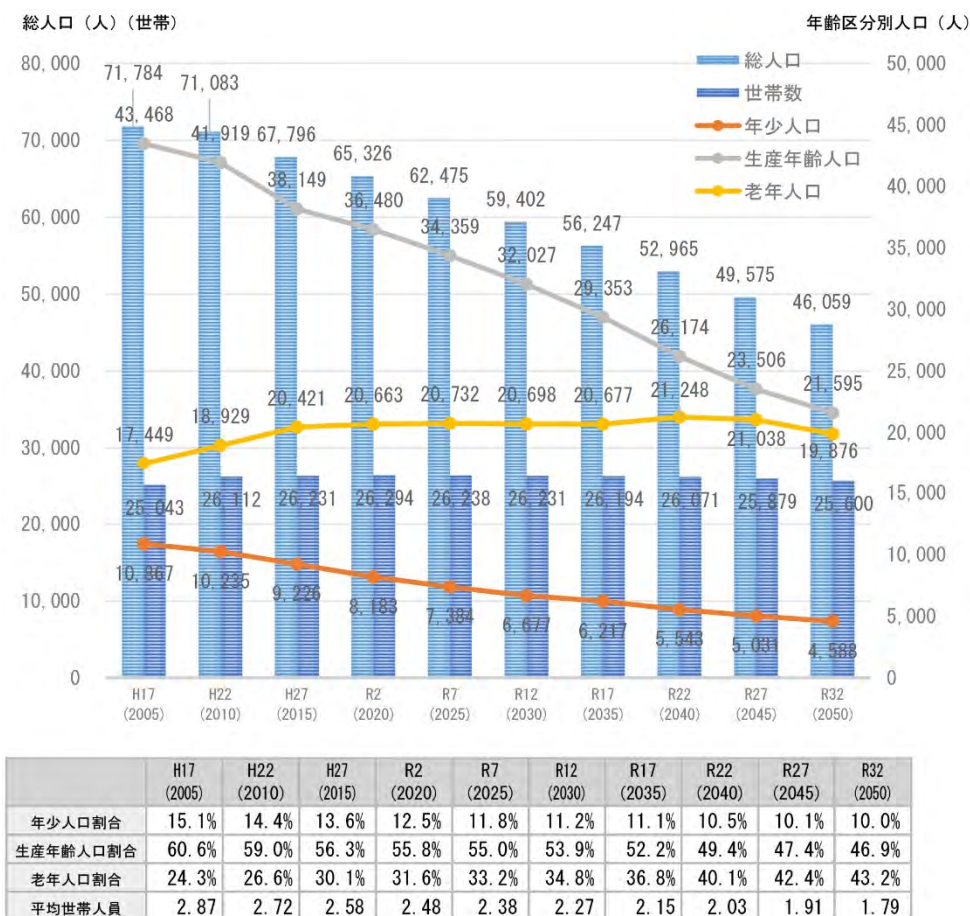
図. 伊那市内の歴史文化資源の分布状況

第4節 社会的環境

1 人口

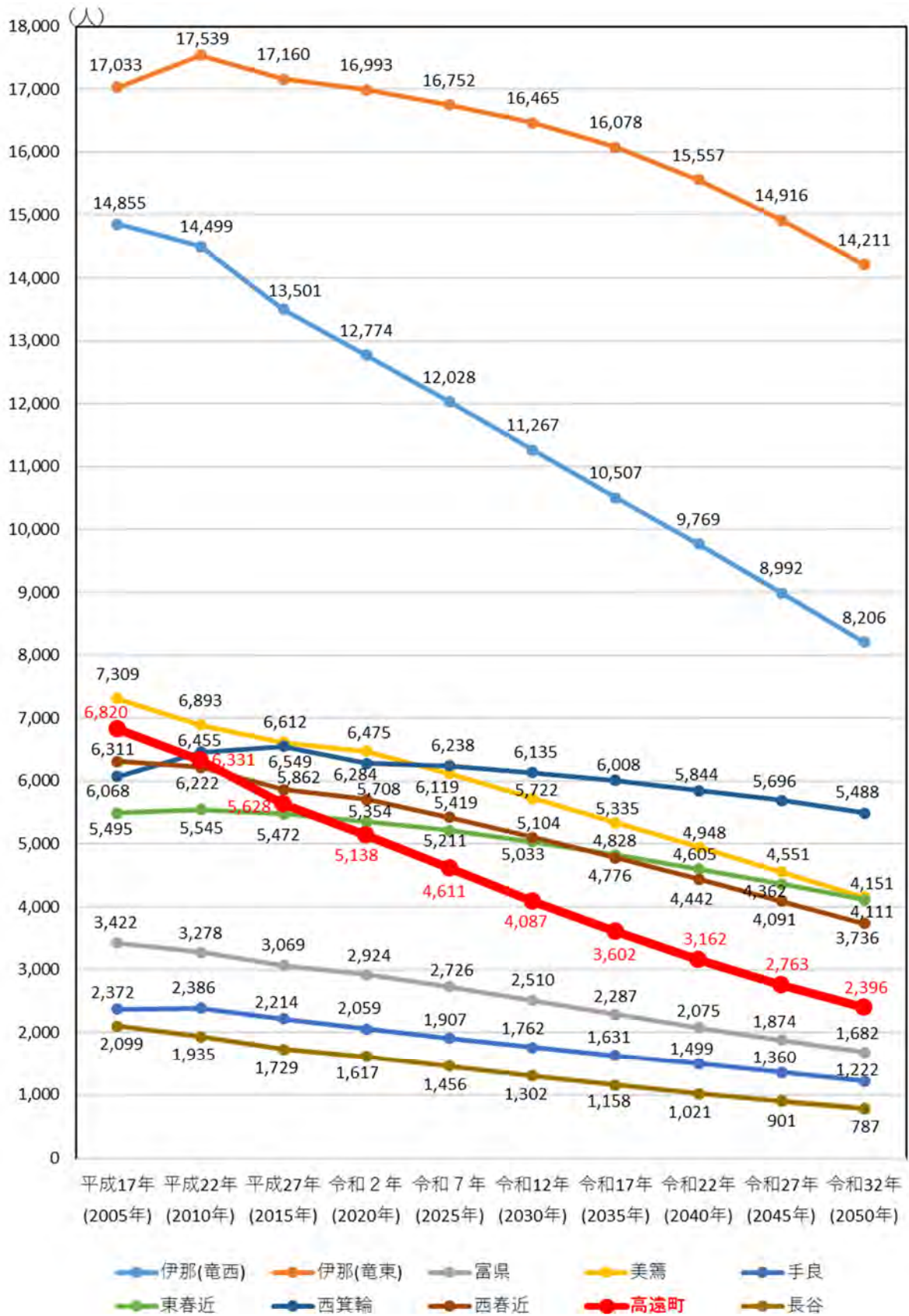
伊那市の人口は、令和7年(2025年)4月1日現在64,702人です。平成17年(2005)までは増加傾向でしたが、自然動態での出生数の減少と、社会動態での転出者超過により、それ以降は徐々に減少しています。令和7年(2025年)3月策定の「第3期伊那市地方創生人口ビジョン」では、25年後の令和32年(2050年)の将来人口は46,059人で、現在よりも約18,600人減少すると予測しています。年齢3区分別人口で見ると、令和32年(2050年)では、年少人口や生産年齢人口ばかりでなく、老年人口も一旦増加後に減少すると見込まれています。

地域別の人口は、伊那地域が58,286人、高遠町地域が4,898人、長谷地域が1,518人で、令和32年(2050年)の将来推計値では、伊那地域が現在より約26%減の42,807人、高遠町地域が約51%減の2,396人、長谷地域が約48%減の787人となっています。高遠町地域や長谷地域の人口減少が大幅であり、文化財保存活用の支え手や担い手不足が見込まれることから、伊那市全体で高遠城跡の文化財価値を共有し、保存活用につなげていく必要があります。



※年齢不詳の人数を含まない。
平成17年から令和2年までは国勢調査の実績値、令和7年以降はコーホート変化率法による推測値。
年少人口は0～14歳、生産年齢人口は15～64歳、老年人口は65歳以上。

図. 総人口・年齢区分別人口の推計 (資料:『第3期伊那市地方創生人口ビジョン』令和7年(2025年))



※ 平成17年から令和2年までは国勢調査の実績値、令和7年以降はコーホート変化率法による推測値。

図. 地域別人口の推移 (参考:『第3期伊那市地方創生人口ビジョン』(令和5年(2025年)))

2 交通

伊那市は本州の中央部に位置し、中央構造線をはじめとする断層や天竜川の影響を受けてできた南北に細長く伸びる谷あいの地にあり、古くから南北方向に街道が発達しました。また、周辺地域と行き来するためには、東西方向の街道も欠かせず、時代に応じて様々な街道が東西南北に走っていました。

高遠城の北側には伊那谷と諏訪を結ぶ「杖突街道」、東側には遠江へ通じる「秋葉街道」が通り、2つの街道は高遠城の北で合流します。また、高遠城の東にある月蔵山を越えると、天台宗や日蓮宗布教の道である「法華道」が通っており、歴史的に見ても物流、軍事、信仰面において交通の要衝に位置していました。

現在は伊那地域の中央部を南北に JR 飯田線が走り、中央本線・東海道本線へ連絡しているほか、中央自動車道や国道 153 号をはじめ、国道 361 号、同 152 号及び県道が縦横に走り、市内の東西・南北が結ばれています。高遠城跡は、市内東部エリアにあるため、鉄道路線とは距離がありますが、国道 152 号と同 361 号の合流点に位置することから、自動車におけるアクセスは比較的しやすいといえます。

3 土地利用

伊那市の土地利用は大きく分けて、農地、住宅地、商業地、工業地、森林で構成されています。高遠町地域や長谷地域からなる市域の東側は、南アルプス国立公園と三峰川水系県立公園、西側は中央アルプス県立公園に指定されており、3,000m級の山々を有する山岳地や森林地域が広がっており、高遠城跡も三峰川水系県立公園の範囲に含まれます。

また伊那(竜西)地域の天竜川右岸には市街地が形成され、古くからの住宅地や商業地が集中するほか、国道 153 号沿いや天竜川左岸の都市計画道路環状南線(ナイスロード)沿いには郊外型の店舗や企業が多数立地し、商業地帯が形成されています。こうした市街地の外周部には広大な優良農地が広がるほか、広い段丘面を利用した工業団地が整備されています。

高遠町地域においては、古くから町人町であった西高遠地区に商業地が形成されており、中央構造線に沿って南北に流れる三峰川、藤沢川、山室川(やまむろがわ)やその支流を中心とした谷筋に集落、農地が見られます。

高遠城跡は都市計画区域に含まれ、史跡指定地のうち本丸(ほんまる)や二ノ丸(にのまる)等約 5.5ha が都市公園法及び伊那市都市公園条例に基づく「高遠城址公園」となっているほか、三ノ丸は第1種中高層住宅専用地域に指定されています。

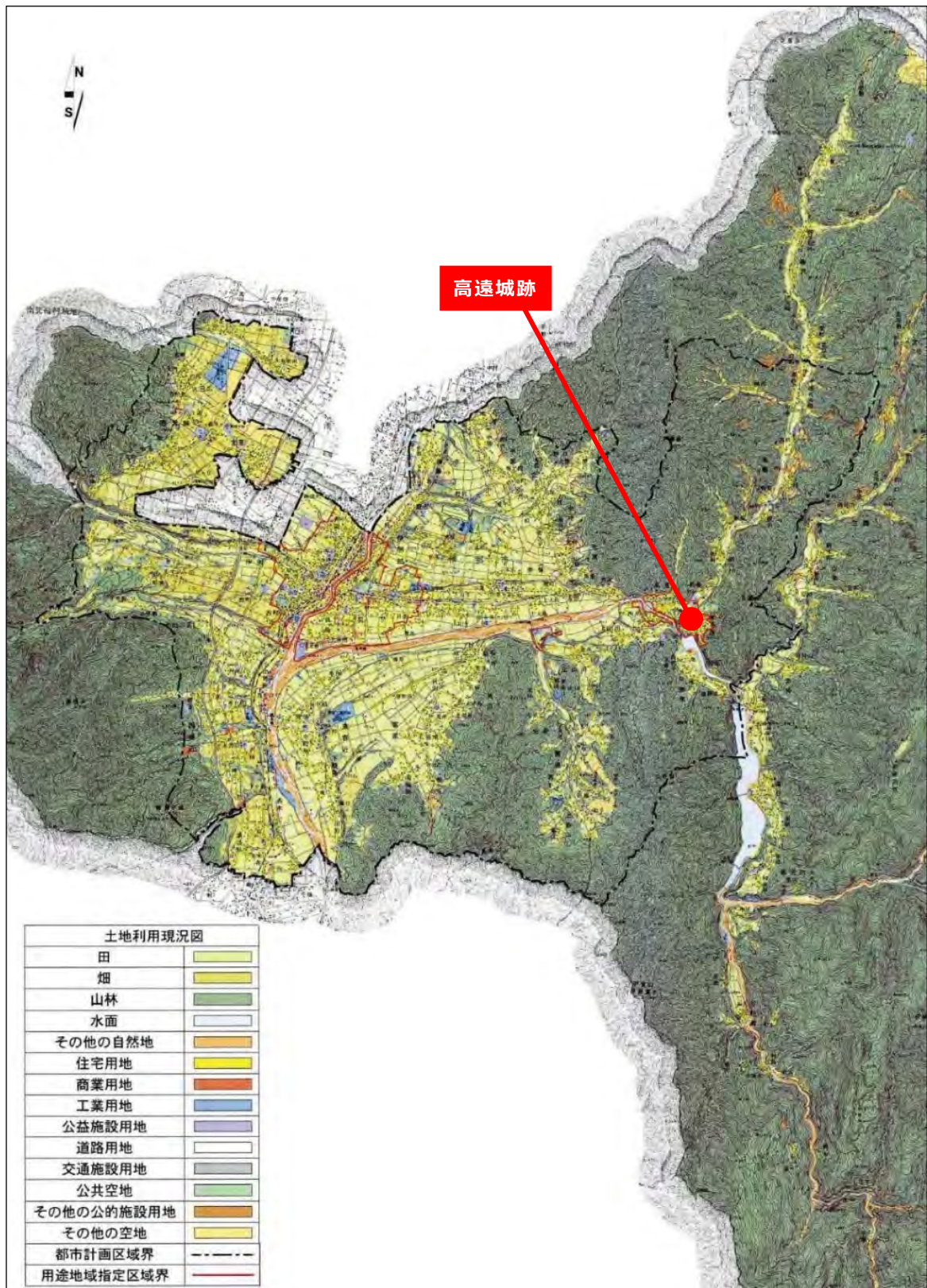


図. 土地利用の状況

(参考：『第2次伊那市総合計画 基本構想・前期土地利用計画』平成31年(2019年)
『伊那市都市計画マスタープラン』平成21年(2009年))

4 周辺の社会教育関連施設

史跡の周辺には8つの社会教育関連施設があり、いずれも史跡から半径1km以内に集中しています。この内、伊那市立高遠町歴史博物館や伊那市立高遠町図書館では、高遠城に関連する文献史料や絵図史料を数多く収蔵しており、公開活用されています。特に高遠町歴史博物館では、これらの史料のほか史跡内の発掘調査で出土した遺物を展示するなど、高遠城を紹介する展示を通年行っています。城や地域の歴史に関連する書籍やグッズ等も販売しており、史跡の公開活用の上で欠かせない施設です。

表. 史跡高遠城跡周辺の社会教育関連施設一覧

施設名称		位置	備考
伊那市立高遠町図書館		伊那市高遠町西高遠 810 番地 1	図書館
伊那市高遠町総合福祉センターやますそ		伊那市高遠町西高遠 1644 番地	福祉増進・教養・娯楽施設
高遠町公民館		伊那市高遠町西高遠 1644 番地	公民館
伊那市民俗資料館	旧池上家	伊那市高遠町西高遠 1725 番地の 1	博物館
	旧馬島家・高遠なつかし館	伊那市高遠町東高遠 2074 番地の 1	
信州高遠美術館		伊那市高遠町東高遠 400 番地	博物館
伊澤修二生家		伊那市高遠町東高遠 213 番地 1	文化財公開施設
伊那市立高遠町歴史博物館		伊那市高遠町東高遠 457 番地	博物館
伊那市高遠 B&G 海洋センター		伊那市高遠町勝間 236 番地 2	海洋利用施設

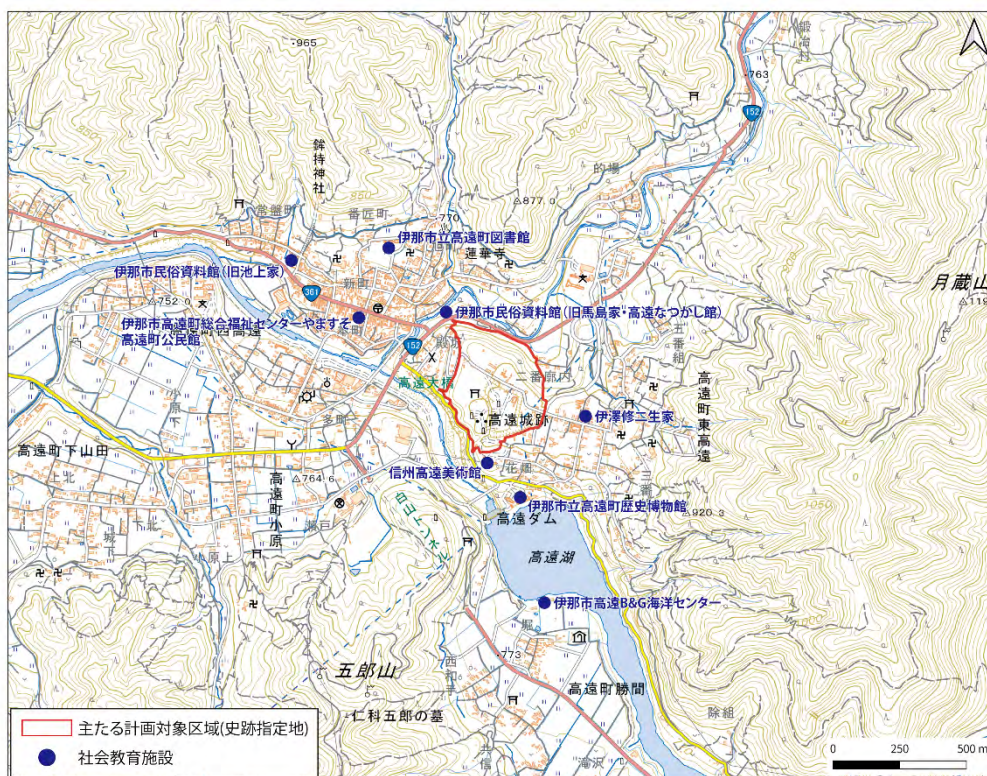


図. 史跡周辺の社会教育施設の位置

5 観光客数

平成30年(2018年)から令和6年(2024年)までの観光客数の推移を見ると、平成30年(2018年)から令和元年(2019年)までは増加していましたが、令和2年(2020年)は新型コロナウイルス流行の影響で大幅に減少しました。令和3年(2021年)からは再び増加しています。観光客数の地域別の構成比を見ると、伊那地域を訪れる人が半数以上を占めており、高遠城跡を含む高遠町地域が2～3割、長谷地域が1割です。観光地点別に見ると、伊那食品工業(かんてんぱぱガーデン)や伊那スキーリゾートがある伊那西部高原が最も多く、次いで羽広、高遠城址公園(高遠城跡)の順になっています。伊那市を訪れる観光客の多くが高遠城跡を訪れていることが分かります。

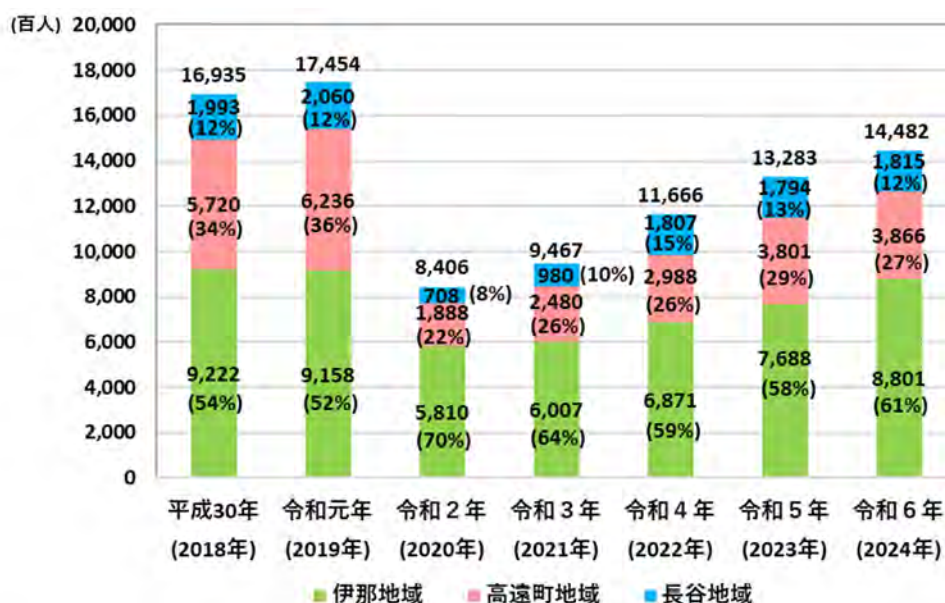


図. 地域別年間観光客数の推移 (参考: 令和6年(2024年)長野県観光地利用者統計調査)

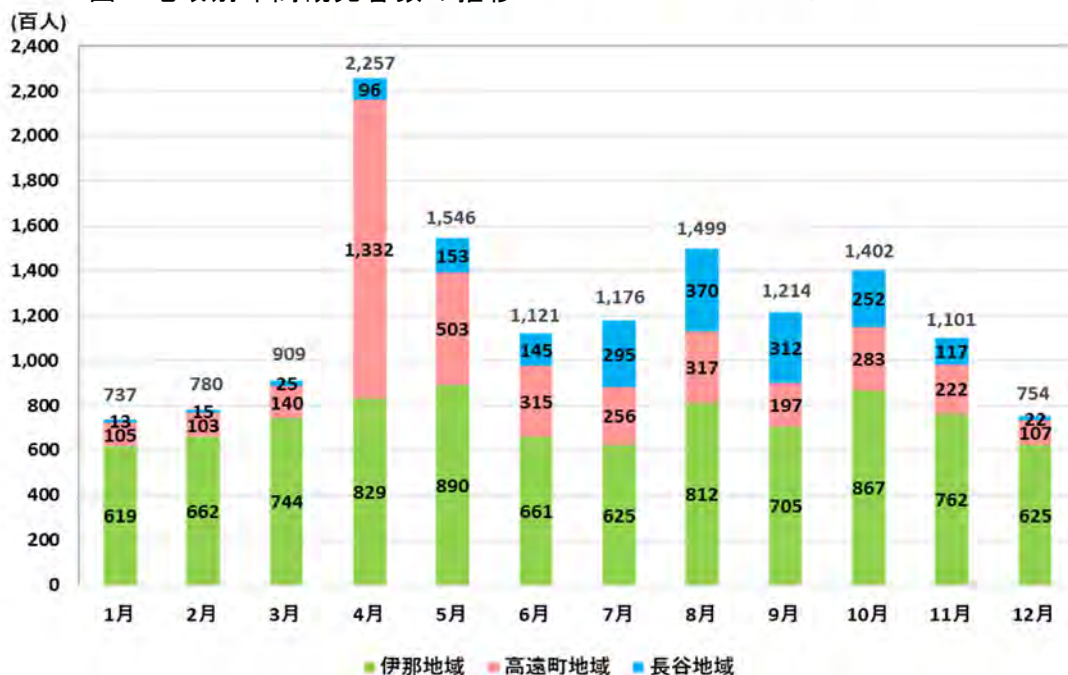


図. 令和6年月別観光客数の推移 (参考: 令和6年(2024年)長野県観光地利用者統計調査)

表. 伊那市の主な観光地

観光地名		主な施設等
伊那地域	羽広	みはらしファーム 羽広荘(令和4年閉館) みはらしの湯
	伊那西部高原	伊那スキーリゾート 伊那食品工業
高遠町地域	高遠城址公園	城址公園 高遠町歴史博物館 信州高遠美術館 さくらホテル
	高遠温泉さくらの湯	さくらの湯
	入笠山	山小屋入笠農協ハウス
	遠照寺・山室溪谷	遠照寺
	千代田湖、晴ヶ峰、青少年自然の家	国立信州高遠 青少年自然の家
	鹿嶺高原	雷鳥荘・バンガロー
長谷地域	南アルプスむら長谷・美和湖	南アルプスむら
		林道バス
	南アルプス北部・分杭峠	北沢峠こもれび山荘 仙丈小屋 分杭峠



(参考：令和6年(2024年)長野県観光地利用者統計調査)

図. 伊那市の主な観光地の位置

6 高遠城跡の利用者数(高遠城址公園入園者数)

高遠城跡の利用者数については、都市公園として開放されている高遠城址公園の入園者数で把握しています。入園者の多くは、城跡内のタカトオコヒガンザクラが開花する毎年3月から4月にかけてに集中しています。昭和58年以降、観桜期は有料となっており、伊那市民以外が入園する場合は入園料を徴収しています。

年間入園者数は、平成8年(1996年)の57万人をピークに減少していますが、年間利用者数に占める観桜期以外の利用者の割合は年々増えており、四季を通じた高遠城跡の利用が進んできていることが分かります。

表. 高遠城址公園利用者数

(単位：万人)

年(和暦)	S58	S59	S60	S61	S62	S63	H元	H2	H3	H4	H5
年間利用者数								36.1	36.2	38.0	42.0
有料入園者数 (観桜期)	13.5	17.4	14.8	17.9	16.7	20.3	18.0	20.4	20.5	25.1	29.2
備考	観桜期有料化										

年(和暦)	H 6	H 7	H 8	H 9	H 10	H 11	H 12	H 13	H 14	H 15	H 16
年間利用者数	40.7	39.6	57.0	51.8	42.8	44.5	48.4	47.1	39.6	41.7	44.8
有料入園者数 (観桜期)	27.8	27.7	39.8	36.1	28.8	32.2	39.4	37.9	30.9	32.9	34.3
備考											

年(和暦)	H 17	H 18	H 19	H 20	H 21	H 22	H 23	H 24	H 25	H 26	H 27
年間利用者数	42.2	43.0	42.7	41.4	35.8	38.1	29.9	32.9	37.3	36.8	34.0
有料入園者数 (観桜期)	31.5	33.2	29.1	29.8	25.7	23.0	15.3	17.5	22.3	23.2	15.8
備考		市町村合併					東日本大震災		設有料入園見直し期間		

年(和暦)	H 28	H 29	H 30	H 31	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6
年間利用者数	32.1	31.9	26.9	34.1	5.1	15.0	20.3	25.8	21.7
有料入園者数 (観桜期)	15.5	16.7	12.0	16.1	0	6.9	9.1	10.6	10.8
備考					新城址公園閉鎖 新型コロナウイルス流行				

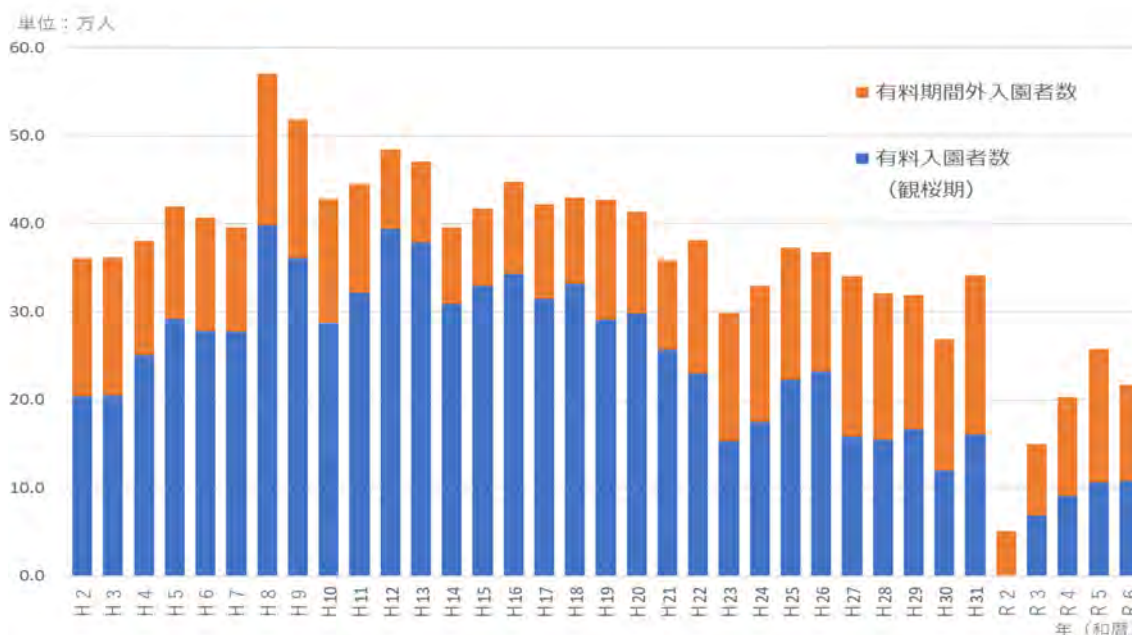


図. 史跡高遠城跡の利用者数推移